はじめに……4
一　虫好きの少年時代……7
二　医学への道……18
三　ペシャワールへ……27
四　山岳の診療所……42
五　井戸を掘る……55
六　戦争と食糧支援……64
七　緑の大地計画……77
八　命の尊さ……93
九　日本での講演活動……101
十　一隅を照らす……113
おわりに……123
資料　哲をとりまく人びと……128
哲をもっと知ろう……130
哲の人生と、生きた時代……136
ともに活動した人びと……140

一九九八（平成十）年、新しい病院が誕生しました。哲がペシャワールで医療活動を開始してちょうど一四年が経っていました。

それまで、ペシャワールで足場となっていたのは、哲が最初に赴任したミッション病院でしたが、病院内で内部対立が起こったり、資金面での問題が発生したこともあって、自分たちの病院をつくることにしたのです。

七〇床の新しい病院は、ＰＭＳ基地病院といいます。ＰＭＳとは、ペシャワール会医療サービスの略*です。地上二階地下一階、建坪約一〇〇〇坪の病院建築にかかった費用の約七〇〇〇万円は、すべてペシャワール会への寄付でまかなわれました。この病院の開院式には、現地と日本の招待客二〇〇名、パキスタン人、アフガニスタン人の現地職員一四〇名、日本人ワーカー四名が参列しました。

この病院ができたことで、パキスタンとアフガニスタン両国にまたがる安定した医療活動ができるようになりました。

二〇〇〇（平成十二）年の春、中央アジア全体が大干ばつにおそわれました。水不足によって土地がかわいて農作物が育たなくなってしまったのです。中でもアフガニスタンの被害がもっとも深刻で、人口の半分以上、およそ一二〇〇万人が被災し、四〇〇万人が食糧不足で必要な栄養が得られない飢餓の状態におちいり、一〇〇万人が餓死の危険があると、国連の機関がうったえました。これほど厳しい状況だったのにもかかわらず、国際社会は、あまり支援の手をさしのべようとはしませんでした。

もともとアフガニスタンは自給自足の農業国です。しかし、水がなければ田畑をたがやせません。干ばつによって、食糧生産が半分以下に落ちこんで、農地の作物が育たなくなる砂漠化も進んでいました。

*ペシャワール会医療サービス　現地での事業を行う団体。2010年に平和医療団・日本と名前を変更しますが、略称はそのままＰＭＳです。

きれいな飲み水がないので、時には川底のどろ水さえ飲むことになります。食糧不足で栄養失調になっていたために体力も失っていた人びとは、きたない水を飲んで下痢を起こすと、簡単に命を落としてしまいます。

干ばつの犠牲になるのは、多くは小さな子どもでした。子どもたちは、アメーバ赤痢や細菌性赤痢という病気で体の水分が不足して脱水症状になって死んでいくのです。

死にかけた子をだいた若い母親が、時には何日もかけて歩いて診療所にやってくるようになりました。診療所の外に並び、診療を待っているうちに、子どもが亡くなってしまい、冷たくなっていく我が子を、母親がずっとだきしめている——そんなことも少なくありませんでした。

もう、病気の治療どころではないと思った哲は、診療所自ら飲料水の

確保に乗り出すことに決めました。二〇〇〇（平成十二）年七月のことでした。

八月には、アフガニスタン東部の中心都市であるジャララバードにPMS水源対策事務所をつくり、本格的な井戸掘り事業が開始されました。この時、先頭になって活やくしたのが、ペシャワールのPMSで働いていた蓮岡修、目黒丞たち、日本の若者でした。そして、井戸掘りの作業には、タリバンも、反タリバンの人びとも、こぞって協力をしたのです。

では、実際の井戸掘りの作業とは、どんなものだったのでしょうか。

このあたりにも、井戸はありました。けれども、すっかりかれていたのです。水を出すためには、もっと深く掘らなければならないのですが、二〇メートルも掘らないうちに、かたい岩ばんにつきあたってしまいます。ツルハシやシャベルでは、とうてい歯が立ちません。

その時、思わぬものが役に立ちました。

アフガニスタンでは、長いこと紛争が続いてたために、ロケット砲や地雷の不発弾が残っていました。そこで、この不発弾の火薬を取り出して使うことにしました。大きな岩にのみで穴をあけて、そこに火薬をつめて、爆破させたのです。この作業には、爆破が得意だった元農民兵たちが活やくしました。

日本の若者たちは、地元の職員たちを率いて、作業を広げていきました。そうして掘った井戸は、この年の十月までに二七四か所、二〇〇一（平成十三）年の九月までに、六六〇か所となり、その九割以上で水を出すことに成功しました。この井戸掘り事業は、二〇〇六（平成十八）年まで続けられ一六〇〇か所になりました。

飲料水の確保はとても大きなことですが、水だけでは生きていけません。食糧が必要です。しかし、水不足で農業ができなくなったために、

▲どろ水を飲む子ども。きたない水を飲んで体をこわして命を落とす子がたくさんいた。（写真：ペシャワール会）

▲井戸掘り作業。まわりの土地はかわいて砂漠化している。（写真：ペシャワール会）

人びとは、出稼ぎ難民となって農村から出ていきます。中には、武器を手にして内戦に参加していく者もいます。兵士として内戦に加われば、食べていくことができるからです。

哲たちは、農村を回復させることが健康と平和のために必要だと考えて、砂漠化する田畑をよみがえらせることを目指します。目標として、農業用の水を得ることがかかげられました。

この地域には、伝統的な農業用地下水路として、カレーズというものがありました。それは、山ろくから水を引く地下の用水路から水を地表に導くものです。

このカレーズを復活させたおかげで、診療所近くの砂漠化した田畑が短期間でよみがえり、一〇〇家族もの人びとが、もどってきて農業を営むことができました。カレーズにも水の量に限界があるので、さらに、直径五メートル以上の農業用水の井戸をつくり、緑化がさらに広がって、

もどってくる人も増えました。

しかし、今度は地下水位が下がり始め、この干ばつが並のものではないと思い知らされます。

のちに、中村哲は、大干ばつをふり返ります。

今思い起こすと、アフガン大干ばつは、世界を席巻する「気候災害」の前哨戦であった。

今、世界では気温の上昇や砂漠の増加など気候変動によるさまざまな問題が指摘されています。その大きな原因となっている二酸化炭素をたくさん排出してきたのは、欧米や日本などの先進国です。それなのに、アフガニスタンのような発展途上国が、これほどひどい被害をうけてしまうのは道理に合わないと、いきどおりを覚える哲でした。

＊前哨戦　本格的な戦いの前の、準備的な小さな戦い。